

文部省検定済教科書

13	漢文 007
秀英	

古典(漢文)

# 詩文選

石黒中原藤  
川須里田堂  
忠重義種明  
久彦夫成保

編著

秀英出版

別記著作者

文学博士 藤堂明保

大東文化大学教授  
文学博士 原田種成

前都立八王子北  
高等学校校長 中里義夫

大東文化大学教授 黒須重彦

桜美林大学教授 石川忠久

詩文選

13 秀英 · 漢文007 · 84ページ

昭和58年3月20日 印刷  
昭和58年3月25日 発行

定価 文部大臣が認可し官報で告示  
した定価（上記の定価は、各教科  
書取次供給所に表示します）

著作者 藤堂明保  
（ほか四名）

発行者 東京都中央区銀座一ノ九ノ一  
株式会社 秀英出版

代表者 山本春男

印刷者 東京都板橋区志村一ノ一一ノ一  
凸版印刷株式会社

代表者 鈴木和夫

発行所株式会社 秀英出版

本社 東京都中央区銀座一ノ九ノ一〇  
営業所 東京都新宿区納戸町四〇

電話 二六〇局・五二八二（代）

本書の内容・販売等に関するご連絡は営業所あてにお願いいたします。

昭和57年3月31日 文部省検定済 高等学校国語科用・古典(漢文)

藤堂明保  
中原種成  
里田義夫  
黒須重彦  
石川忠久

編著

# 詩文選

秀英出版

## 凡例

一 仮名遣い 原文は、すべて歴史的仮名遣いを用いた。

二 読み仮名 「常用漢字表」(昭和56年10月1日内閣告示)以外の漢字、または同表で音訓が認められていない読み方をする常用漢字には、各単元の初出ごとに、その読み方を平仮名で施した。

三 句読・返り点 原則として「漢文の句読・返点・添仮名・読方法」(明治45年文部省報告)に従った。

四 送り仮名 原則として「送り仮名の付け方」(昭和48年6月内閣訓令・告示)によった。

(1) 代名詞の「此」「其」などに助詞のついた場合も

「此」「其」のようにした。  
〈例〉之―之 是―是

(2) 次のような語は、単元の初出以降は送り仮名をつ

けなかった。

〈例〉豈―豈 唯―唯 尙―尙 猶―猶 復―復

(3) 再読文字の送り仮名は、次のようにした。

〈例〉未―未 當―當 將―將 猶―猶

(4) 漢文特有の読みぐせで、古文の文法とあまりかけ離れたものは訂正した。

〈例〉無―無 無―無

五 漢字 原文はすべて旧字体を用い、新旧字体の著しく異なるものは、各単元の初出ごとに、その漢字の左上に\*印をつけ、脚注欄に新旧字体を示した。

〈例〉學||学 國||国 爲||為 與||与

省略したのは次のような場合である。

(1) 点画の方向・長短のみの相違||青↓青 月↓月

(2) 次の部首を含む漢字で、つくり(1)以上の相違の

ない場合||而↓ネ 倉↓倉 氵↓氵

(3) その他||者↓者 德↓德 漢↓漢 綠↓綠

目次

一 周の詩

桃 天  
碩 鼠  
橘 頌

無名氏 六  
" 七  
屈 原 九

二 漢の詩

行行重行行  
迢迢牽牛星  
生年不<sub>レ</sub>滿<sub>レ</sub>百  
薤 露 歌

無名氏 三  
" 四  
" 五  
" 五

三 六朝の詩

江 南  
詠 懷 其ノ一

無名氏 六  
阮 籍 六

四 初唐の詩

飲 酒 其ノ五  
歸<sub>二</sub>園田居<sub>一</sub>

野 望

易水送別

照<sub>レ</sub>鏡見<sub>二</sub>白髮<sub>一</sub>

回 卿 偶 書

蜀 中 九 日

登<sub>二</sub>幽州臺<sub>一</sub>歌

五 盛唐の詩

黃 鶴 樓

胡 笳 歌

春 曉

登<sub>二</sub>鶴鵲樓<sub>一</sub>

王 維

陶 潛 九

" 三

王 績 三

駱 賓 王 三

張 九 齡 三

賀 知 章 三

王 勃 三

陳 子 昂 三

崔 顥 三

岑 參 三

孟 浩 然 三

王 之 渙 三

三



鹿柴

竹里館

九月九日憶山東兄弟

雜詩

送秘書晁監還日本

李白

(絕句)

秋浦歌

早發白帝城

山中問答

山中與幽人對酌

春夜洛城聞笛

峨眉山月歌

望廬山瀑布

(律詩)

送友人

登金陵鳳皇臺

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

(古詩)

將進酒

子夜吳歌

杜甫

(絕句)

江南逢李龜年

(律詩)

月夜

登岳陽樓

登高

(古詩)

羌村

哀江頭

六 中唐の詩

江雪

秋思

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇



楓橋夜泊

度<sub>二</sub>桑乾<sub>一</sub>

白居易

琵琶行并序

八月十五日夜禁中獨直對<sub>レ</sub>

月憶<sub>二</sub>元九<sub>一</sub>

燕詩示劉叟并序

### 七 晚唐の詩

山行

夜雨寄<sub>レ</sub>北

焚書坑

送<sub>レ</sub>別

山亭夏日

### 八 宋以後の詩

春夜

張繼 哭

賈島 哭

哭

哭

哭

哭

哭

杜牧 哭

李商隱 哭

章碣 哭

魚玄機 哭

高駘 哭

哭

蘇軾 哭

### 九 文

遊<sub>二</sub>山西村<sub>一</sub>

尋<sub>二</sub>胡隱君<sub>一</sub>

漁父辭

五柳先生傳

春夜宴<sub>二</sub>桃李園<sub>一</sub>序

雜說

送<sub>二</sub>薛存義之<sub>レ</sub>任序

前赤壁賦

陸游 哭

高啓 哭

哭

哭

屈原 哭

陶潛 哭

李白 哭

韓愈 哭

柳宗元 哭

蘇軾 哭

付録

漢詩の形式ときまり  
漢文参考年表

哭 哭



# 一周の詩

中国の文明はおよそ三千五百年ほど昔、黄河の流域から興った。殷のあと周が興り、うたい継がれた民衆のうた声<sup>ウタノコエ</sup>が、やがて詩人の手を経て整えられ、まとめられたのが『詩経』である。紀元前十二世紀から同六世紀までの、黄河流域の国々のうた三〇五首が収められている。人々の生活に根ざした喜びや悲しみをうたうもの、権力者の横暴をそれとなくそしめるもの、開国伝説をうたうものなど、素朴で穏やかなうたいぶりであられる。

『詩経』のあと、南の楚の国から興ったが『楚辞』である。北の『詩経』が四音のリズムだったのに対し、三言を基調とする全く異質のうたである。紀元前四世紀、この地方のうたを整え、大きな足跡を残したのが屈原である。讒言のために追放になった屈原は、胸のうれいをこめて壮大なうたの絵巻を繰り広げた。概して『楚辞』は、山や川の変化に富む南の風土を反映して、幻想的なうたいぶりで、現実的な北のうた『詩経』と好対照をなしている。

桃 天

無名氏

桃<sup>の</sup>天<sup>タル</sup>  
灼<sup>しゆ</sup>灼<sup>テリ</sup>其<sup>ソノ</sup>華

- (1) 無名氏 よみ人知らず。  
(2) 天天 若々しくしなやかなさま。  
(3) 灼灼 あでやかなさま。



之子于歸<sup>(1)</sup> \*

桃之夭夭

有<sup>(3)</sup>蕢其實

之子于歸

宜<sup>(2)</sup>其家室

桃之夭夭

之子于歸

宜<sup>(2)</sup>其家室

其葉蓁蓁<sup>(4)</sup>

宜<sup>(2)</sup>其家人



桃花の美人(部分)  
(アスターナ出土)

(1) 于歸 嫁ぐ。「于」は往く。一説に句調を調える助字。

(2) 室家 嫁ぎ先の家庭。次の章の「家室」も同義。

(3) 蕢 実がずっしりとはちきれそうなさま。

(4) 蓁蓁 葉の生き生きと茂っているさま。

(5) 碩鼠 大きなねずみ。

◇無<sup>(6)</sup>食ニ我黍 一 この場合は禁止。

(6) 莫我肯顧 私をかまってくれようとはしなかった。

歸<sup>(6)</sup> 實<sup>(6)</sup> 實<sup>(6)</sup> 實<sup>(6)</sup>

碩鼠碩鼠

三歲貫<sup>(6)</sup>女

無<sup>(6)</sup>食<sup>(6)</sup>ニ我黍<sup>(6)</sup>

莫<sup>(6)</sup>我肯顧<sup>(6)</sup>

無名氏

逝<sup>ニ</sup>將<sup>ニ</sup>去<sup>レ</sup>女<sup>ヲ</sup> 適<sup>ニ</sup>彼<sup>カノ</sup>樂<sup>カ</sup>土<sup>ニ</sup>  
 樂<sup>ニ</sup>土<sup>ニ</sup>樂<sup>ニ</sup>土<sup>ニ</sup> 爰<sup>ニ</sup>得<sup>ニ</sup>我<sup>ガ</sup>所<sup>ヲ</sup> 一<sup>ニ</sup>

碩<sup>ニ</sup>鼠<sup>ニ</sup>碩<sup>ニ</sup>鼠<sup>ニ</sup> 無<sup>レ</sup>食<sup>ニ</sup>我<sup>ガ</sup>麥<sup>ヲ</sup> 一<sup>ニ</sup>

三<sup>ニ</sup>歲<sup>ニ</sup>貫<sup>レ</sup>女<sup>ニ</sup> 莫<sup>ニ</sup>我<sup>ガ</sup>肯<sup>ヘテ</sup>德<sup>メクムコト</sup> 一<sup>ニ</sup>

逝<sup>ニ</sup>將<sup>ニ</sup>去<sup>レ</sup>女<sup>ヲ</sup> 適<sup>ニ</sup>彼<sup>カノ</sup>樂<sup>カ</sup>國<sup>ニ</sup> 一<sup>ニ</sup>

樂<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>樂<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup> 爰<sup>ニ</sup>得<sup>ニ</sup>我<sup>ガ</sup>直<sup>タダシキヲ</sup> 一<sup>ニ</sup>

碩<sup>ニ</sup>鼠<sup>ニ</sup>碩<sup>ニ</sup>鼠<sup>ニ</sup> 無<sup>レ</sup>食<sup>ニ</sup>我<sup>ガ</sup>苗<sup>ヲ</sup> 一<sup>ニ</sup>

三<sup>ニ</sup>歲<sup>ニ</sup>貫<sup>レ</sup>女<sup>ニ</sup> 莫<sup>ニ</sup>我<sup>ガ</sup>肯<sup>ヘテ</sup>勞<sup>イハルコト</sup> 一<sup>ニ</sup>

逝<sup>ニ</sup>將<sup>ニ</sup>去<sup>レ</sup>女<sup>ヲ</sup> 適<sup>ニ</sup>彼<sup>カノ</sup>樂<sup>カ</sup>郊<sup>ニ</sup> 一<sup>ニ</sup>

樂<sup>ニ</sup>郊<sup>ニ</sup>樂<sup>ニ</sup>郊<sup>ニ</sup> 誰<sup>ニ</sup>之<sup>カニ</sup>永<sup>ク</sup>號<sup>ス</sup> 一<sup>ニ</sup>

◇逝將 さあ……しよつ。

(1)樂土 幸せの地。  
 (2)我所 自分の安住の地。

(3)德 恩恵を施すこと。

(4)樂國 幸せな都。

(5)直 生きがい。

(6)樂郊 幸せな村。

(7)誰之永號 だれがいつまでも泣き叫んだりするものか。「之」は強めの助字。

將||將 樂||樂 麥||麥 國||國  
 勞||勞 號||號

(1)屈原 (前340) 前278 戦国時代、楚の名相。名は平、原は字。信任された懐王の死後、流浪して祖国の前途を憂い、汨羅の淵に身を投げて死んだ。「楚辞」の代表的作者。

(2)后皇 天地のこと。

(3)嘉樹 めでたい樹。

嗟<sup>あ</sup>爾<sup>なんぢ</sup>幼<sup>わか</sup>志<sup>こころ</sup>有<sup>あ</sup>以<sup>も</sup>異<sup>ちが</sup>兮<sup>や</sup>  
 紛<sup>ま</sup>縵<sup>ま</sup>宜<sup>よろ</sup>脩<sup>しゆ</sup>脩<sup>しゆ</sup>而<sup>を</sup>不<sup>た</sup>醜<sup>みに</sup>兮<sup>や</sup>  
 精<sup>せい</sup>色<sup>しき</sup>内<sup>うち</sup>白<sup>しろ</sup>類<sup>る</sup>任<sup>まか</sup>道<sup>みち</sup>兮<sup>や</sup>  
 青<sup>せい</sup>黃<sup>わう</sup>雜<sup>ざつ</sup>糅<sup>じゆう</sup>文<sup>ぶん</sup>章<sup>ぢやう</sup>爛<sup>らん</sup>兮<sup>や</sup>  
 會<sup>かい</sup>枝<sup>し</sup>刺<sup>せき</sup>棘<sup>きよく</sup>圓<sup>えん</sup>果<sup>くわ</sup>搏<sup>たつ</sup>兮<sup>や</sup>  
 綠<sup>りよく</sup>葉<sup>えつ</sup>素<sup>そ</sup>榮<sup>えい</sup>紛<sup>ま</sup>其<sup>その</sup>可<sup>た</sup>喜<sup>よろこ</sup>兮<sup>や</sup>  
 深<sup>しん</sup>固<sup>こ</sup>難<sup>なん</sup>徙<sup>うつ</sup>更<sup>さら</sup>壹<sup>いつ</sup>志<sup>し</sup>兮<sup>や</sup>  
 受<sup>う</sup>命<sup>めい</sup>不<sup>た</sup>遷<sup>うつ</sup>生<sup>せい</sup>南<sup>なん</sup>國<sup>こく</sup>兮<sup>や</sup>  
 后<sup>こう</sup>皇<sup>かう</sup>嘉<sup>か</sup>樹<sup>じゆ</sup>橋<sup>はし</sup>徠<sup>らい</sup>服<sup>ふく</sup>兮<sup>や</sup>

橘<sup>きよく</sup>頌<sup>しょう</sup>

屈原

- (4) 徠服 しつかりと根づく。「服」は一つのものにびつたりと寄りそうこと。
- (5) 兮 句中または句末に置いて、語調を調える助字。音はケイ。
- (6) 受命 天命を受けて。橘の性質をいふ。
- (7) 不遷 他に行かない。
- (8) 南國 ここでは楚の国のこと。
- (9) 深固 根が深く固い。
- (10) 壹志 他に心を移さない。この地と一体になつている。
- (11) 素榮 白い花。
- (12) 紛入り乱れるさま。
- (13) 會枝 重なる枝。「會」は重なる。「層」に同じ。
- (14) 刺棘 とがったとげ。「刺」は鋭い。
- (15) 搏 橘の実の丸いことの形容。
- (16) 雜糅 入りまじる。
- (17) 文章 模様。
- (18) 爛 輝くさま。
- (19) 精色 澄んだ色。外皮をいつている。
- (20) 任道 君子をいう。
- (21) 紛縵 香気の盛んなこと。
- (22) 宜脩 よい。よろしい。
- (23) 姱 美しい。

壹||苞 榮||榮 圓||円 雜||雜

\* 獨立不遷（シテ）

深固難徙（ニシテ）

蘇世獨立（ニシテ）

閉心自慎（チ）

不終失過（フビニ）

秉德無私（ト）

參天地兮（マヒハル）

願歲并謝（ハタハ）

\* 與長友兮（トモニ）

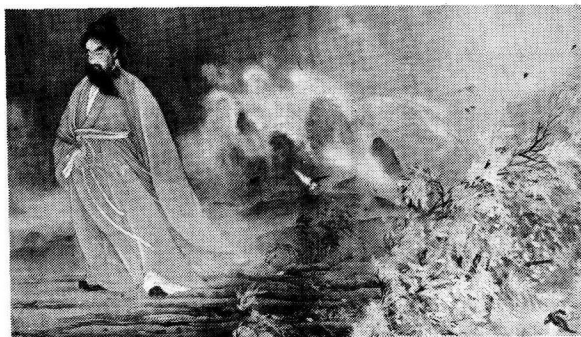
淑離不淫（ニシテ）

梗其有理兮（カタクシテ）

豈不可喜（ハ）

廓其無求（クワシテ）

横而不流（ニシテ）



原(部分) (横山大観筆)

- (1) 廓 心広く無欲なことの形容。
- (2) 蘇世 世に目ざめている。「蘇」はめざめる。
- (3) 横 自由である。
- (4) 不流 節度を失わない。
- (5) 閉心 深く慎む。

(6) 秉 しつかりととりもつ。離さない。

(7) 并 とともに。  
(8) 謝 去る。

(9) 淑離 清らかで節度がある。「離」は世俗のよごれから離れている。  
(10) 梗 樹幹がかたい。  
(11) 理 木理。同時に道理をいう。

獨 || 独 慎 || 慎 參 || 参 與 || 与

年ハ歲ハ雖ハ少ナシト  
行ハ比ス伯ハク夷ニ  
(1)

可シ師トス長トス兮  
置イテ以ツテ爲サン像ト兮  
\* (2)

〔研究〕

- 一 「桃夭」の中にある素朴な情愛を話し合ってみよう。
- 二 「碩鼠」は何をたとえたものか。現代に移して考えてみよう。
- 三 「橘頌」の「橘」は何をたとえたものか。

(1) 伯夷 殷末周初の人。弟の叔斉と共に節を守って首陽山にこもり、わらびを食べてついに餓死した。

(2) 像 手本。模範。

爲 || 為

## 二 漢の詩

漢の初めには、『楚辞』の調子の短い詩がうたわれたが、紀元前二世紀の終り、武帝のころに新しいうた声に興った。『詩経』の伝統を引く、素朴な民衆の哀歡をうたうこれらのうたは、長短ふぞろいを多用して、生き生きとした表現でうたわれた。武帝が起こした樂府(音楽の役所)では、これらのうたを積極的に採り入れ、整え、やがてそれは一つの伝統的な形式となつて伝えられるようになる。後世、これらのうたを「樂府」というようになった。

この新しいうた声の中から、一句が五言の形のものでしだいに広まり、紀元一世紀の末ごろには、一首全部が五言の形をした詩が見られるようになる。五言詩の誕生である。紀元一五〇年ごろ、それは『古詩十九首』となつて開花した。『古詩十九首』は一人の詩人が一時に作つたものではなく、たまたま十九首が残つたのであるが、生き別れた妻の嘆き、彥星を思ふ織女の恋心、人の生命のはかなさや悲しみなどを、深い情感をこめてうたっている。ちようどわが国の万葉のうたにも似たものである。

後漢の末、建安時代(一九〇〜三〇〇)は五言詩が飛躍的に発展した時期である。新しい指導者曹操とその子曹丕(魏の文帝)・曹植は詩にもすぐれており、多くの詩人たちが周囲に集まつて、この新鮮な五言の形式によるうたを高らかにうたつたのである。

漢代の詩歌は、楚調↓樂府↓五言詩と進展して、次の六朝時代以後の隆盛を導き出す源となつたのである。

〔1〕行行重行行

無名氏

行行重行行

與君生別離

相去萬餘里

各在天一涯

道路阻且長

會面安可知

〔3〕胡馬依北風

〔4〕越鳥巢南枝

相去日已遠

〔6〕衣帶日已緩

浮雲蔽白日

〔7〕遊子不願返

思君令人老

〔8〕歲月忽已晚

〔8〕棄捐勿復道

〔9〕努力加餐飯

〔1〕行行重行行『古詩十九首』の第一首。果てしなく旅ゆくさま。

〔2〕君 旅立つた夫をさす。

◇安可知 どのようにして知ることができようか。反語。

〔3〕胡馬 北方の胡地(蒙古地方)から来た馬。

〔4〕越鳥 南方の越(浙江省地方)から来た鳥。

〔5〕南枝 南側にさし出た枝。

〔6〕衣帶日已緩 身がやせ細り、帯が日ごとゆるくなる。

〔7〕願返 こちらのことを気にかける。

〔8〕棄捐 夫から見捨てられる。また、もうあきらめて何も言うまい、の意ともいう。

〔9〕努力加餐飯 たくさん食事を召し上がってください。相手の健康を祈ることば。

與||与 萬||万 餘||余 會||会  
巢||巢 帶||帶

二 漢の詩

① 迢迢牽牛星  
② 牽牛星

織 織擢素手  
③ 織 織擢素手

終日不成章  
④ 終日不成章

泣涕零如雨  
⑤ 泣涕零如雨

河漢清且淺  
⑥ 河漢清且淺

相去復幾許  
⑦ 相去復幾許

盈盈一水間  
⑧ 盈盈一水間

⑩ 脈脈不得語  
⑨ 脈脈不得語

③ 皎皎河漢女  
④ 皎皎河漢女  
⑤ 札札弄機杼  
⑥ 札札弄機杼

無名氏



牽牛織女(漢土版画)

(1) 迢迢 はるかに遠いさま。  
(2) 牽牛星 彦星。一年に一回、天の河を渡って織女星にあうという。

(3) 皎皎 白く清らかに輝くさま。

(4) 河漢女 織女星。「河漢」は天の河。

(5) 織織 細くしなやかなさま。

(6) 札札 機を織る音の形容。

(7) 機杼 機織りの際に横糸を通す器具。

(8) 章 織物の模様。

(9) 盈盈 水が満ちあふれているさま。  
(10) 脈脈 じつとみつめるさま。

織 || 織 淺 || 淺 間 || 間 脈 || 脈



生年不<sub>レ</sub>滿<sub>レ</sub>百<sub>ニ</sub>

無名氏

生年不<sub>レ</sub>滿<sub>レ</sub>百<sub>ニ</sub>

常<sub>ニ</sub>懷<sub>ニ</sub>千歲<sub>ノ</sub>憂<sub>ヒテ</sub>

畫<sub>ハ</sub>短<sub>クシテ</sub>苦<sub>ニシム</sub>夜<sub>ノ</sub>長<sub>キニ</sub>

何<sub>ソ</sub>不<sub>ニ</sub>乘<sub>レ</sub>燭<sub>シキウ</sub>遊<sub>バ</sub>

\*爲<sub>ナスハシミテ</sub>樂<sub>ハシミテ</sub>當<sub>まさニ</sub>及<sub>フ</sub>時<sub>ニ</sub>

何<sub>ソ</sub>能<sub>ヨク</sub>待<sub>タシ</sub>來<sub>ル</sub>茲<sub>シテ</sub>

愚<sub>ハ</sub>者<sub>ハ</sub>愛<sub>ニ</sub>惜<sub>シテ</sub>費<sub>ヲ</sub>

但<sub>ただ</sub>爲<sub>ル</sub>後<sub>ニ</sub>世<sub>ニ</sub>嗤<sub>ニ</sub> (1)

仙人王子喬 (3)

難<sub>シ</sub>可<sub>キコト</sub>與<sub>とも</sub>等<sub>シク</sub>期<sub>ヲ</sub> (2)

薤露歌

無名氏

薤<sub>ハ</sub>上<sub>ノ</sub>露<sub>ニ</sub> 何<sub>ソ</sub>易<sub>ヤオキ</sub>晞<sub>カハキ</sub>

露<sub>ハ</sub>晞<sub>ケドモ</sub>明<sub>ニ</sub>朝<sub>ニ</sub>更<sub>ニ</sub>復<sub>ニ</sub>落<sub>ツ</sub>

人<sub>ハ</sub>死<sub>シテ</sub>一<sub>クヒ</sub>去<sub>ラバ</sub>何<sub>イフレノ</sub>時<sub>ニカ</sub>歸<sub>ラン</sub>

(4) 薤露歌 漢代の葬送歌。「薤」はおおにら。

滿<sub>ニ</sub>懷<sub>ニ</sub>畫<sub>ニ</sub>爲<sub>ニ</sub>為<sub>ニ</sub>樂<sub>ニ</sub>當<sub>ニ</sub>來<sub>ニ</sub>歸<sub>ニ</sub>帰<sub>ニ</sub>

(1) 來茲 來年。「茲」は「年」と同じ。  
(2) 嗤 あざ笑う。  
◇爲「後世嗤」後世の人に笑われる。  
受身。  
(3) 王子喬 伝説的な仙人の名。